

# まなほの 寂庵日記

34

「数えて99歳、白寿よ」と瀬戸内寂庵先生が言う。5月15日は先生の誕生日で、京都では葵祭が開催される日だ。毎年寂庵にはお祝いのお花やプレゼントがたくさん届き、私たちがスタッフは猫の手も借りたいほどの忙しさなので、葵祭は一度も見に行けたことがない。しかし、今年は新型コロナウイルスにより葵祭の行列は中止された。先生の故郷徳島で8月に行われる阿波おどりも行われない。先生

生が知る限り、両方とも中止されたことは戦後なかったそう。楽しいことが次々となくなってしまう。そんな状況なので、満98歳になる今年の誕生日は来客もなく、静かな一日になると予想していた。それがどうだろう。去年と同じくどんとお花が届き、プレゼントの山ができた。大変な時期の心遣いがありがたい。

先生は最近、日中も横になつていることが多い。先

日は体中が痛いと言うので、全身をもみほぐしてあげたが、知らぬ間に肩周りの肉がそけていて、はっと驚いた。

食欲に関しては衰え知らずだったのに、その日は「何も食べたくない」と言うので心底心配になった。帰宅後も、真夜中に寂庵まで車を走らせて先生の様子を見に行きたい衝動に駆られる。電話だけでも思いつけれど、もう休んでいたら、起こしてしまうと思いが込んで眠れなかった。

翌朝、早めに寂庵に着くと、夜中に食べたらしい団子の笹の包みが台所に落ちていた。「大丈夫だった」とほつとする。食欲も戻って、誕生日のお祝いにいた

## 先生との「今」を大切に

いただいた赤ワインを空けた。でも、「100までは生きられそうもないし、あの世で誰にも会いたいと思わない。会っても仕方がないしね」なんて言う。私は自分が死んだ後も先生に会いたい。「老けたね」って私を笑ってほしい。

先生は「100まで生きそうね」と言ったり、「年を越せないんじゃないのかな」と言ったり。明日のこととは誰にも分からない。だからこそ先生との「今」を私は大切にしたいと強く思う。

(瀬戸内寂庵秘書・瀬尾まなほ)

神戸新聞 6月5日分

世の中には数多くの著名人が、2020年の「いま」を自分の生死と共に向かい合い、私達にいろんな問いかけをしてくれています。何かを感じ続ける毎日でいたいものです。



瀬戸内寂庵先生の98歳の誕生日に2人で記念撮影